

## 第146回 三方限古典塾（'18, 12, 20）

### 「南洲翁手抄言志録」（その5）

17 堯・舜・文王、其の遺す所の典謨訓誥は、皆以て万世の法と為す可し。何の遺命か之に如かん。成王の顧命、曾子の善言に至りては、賢人の分上、自ずから当に此くのなるべきのみ。因りて疑う。孔子泰山の歌、後人仮托して之を為すかを。壇弓の信じ叵きは、此の類多し。聖人を尊ばんと欲して、而も卻って之が累を為すなり。 (録- 134)

(意訳) 堯・舜・文王が書経に遺した古代帝王治国の教訓は、皆万世にわたる法則であり、これに優る遺命はない。一方、周の成王による臨終の言や、曾子の善言は、賢人の本文上のことで、聖人のものではない。また、孔子が死に際に作ったと伝わる「泰山の歌」は、後人が孔子にかこつけたもので信じ難い。「礼記・壇弓」には、この類が外にも多く存在している。これは聖人を学ぶに当たって、逆に禍を及ぼすものである。

(余説) 聖人と賢人との違いを強調していますが、賢人の教えも聖人と同様に有意義です。ただ、歴史上の資料から学ぶには、まず疑ってみることも必要だと示唆しているのです。

(参考) 曾子の善言（論語・泰伯篇）「鳥の將に死なんとするや、その鳴くや哀し。人の將に死なんとするや、その言や善し。」（臨終の言葉には心がかもっている）

泰山の歌（礼記・壇弓）「孔子は『泰山其れ頽れんか、梁木其れ壊せんか、哲人其れ萎まんか』と言って、7日後に没せられた。」（梁木壊：賢人が死ぬこと）

18 一部の歴史は、皆形迹を伝うれども、而も情実は或は伝わらず。史を読む者は、須らず形迹に就きては情実を討ね出すを要すべし。 (録- 141)

(意訳) 一部の歴史は、外に現れた跡形の伝えるけれども、どうかすると、その内部に隠されたありのままの事情は伝わらない。故に歴史を読み学ぶ者は、当然なことながら表面上の跡形のみでなく、そこに隠されている真相を探し出す努力をなさねばならない。

(余説) 歴史には勝者の記録が多く、敗者のものは残りにくいのが現実です。特に活字になった歴史はそれが顕著です。半藤一利は「資料を読んで歴史がわかったつもりになってはいけない。たくさんの資料を読み比べて、その間に隠されたものはないかと洞察せねばならない」（歴史と人生）と書いていますが、西郷どんもそこに同感したのでしょうか。

19 博聞強記は聡明の横なり。精義入神は聡明の堅なり。 (録- 144)

(意訳) 何事でも博く知っていて記憶力が強いということは、賢明の横幅（横糸）である。人のあるべき正しい道を深く理解していて、人知を超えるほどに靈妙な奥義まで分かっているということは、賢明の奥行き（縦糸）である。

(余説) 博聞強記だけでは、薄っぺらになります。西郷どんはそれに加えて精義入神を備え、奥行きと厚みによって人々を納得させました。現代の情報過多は重要課題です。

(参考) 易経・繫辞伝「精義入神は以て用を致す」（精義入神があつて物の役に立つ）

20 生物は皆死を畏る。人は其の靈なり。当に死を畏るるの中より、死を畏れざるの理を揀び出すべし。

吾思う、我が身は天物なり。死生の権は天に在り。当に順いて之を受くべし。私の生るるや、自然にして生る。生るる時未だ嘗て喜ぶを知らざるなり。則ち私の死するや、亦自然にして死し、死する時、未だ嘗て悲しむを知らざるべきなり。天をを生じて、天を死せしむ。一に天に聴すのみ。吾れ何ぞ畏れむ。

吾が性は即ち天なり。軀殻は則ち天を蔵するの室なり。精気の物と為るや、天此の室に寓せしめ、遊魂の変を為すや、天此の室より離れしむ。

死の後は即ち生の前、生の前は即ち死の後にして、而して吾が性の性たる所以の者は、恒に死生の外に在り。吾れ何ぞ焉れを畏れむ。夫れ昼夜は一理、幽明も一理、始を原ねて終に反り、死生の説を知る。何ぞ其の易簡にして明白なるや。吾人当に此の理を以て自ら省みるべし。

(録-137)

(意識) 生物は皆死を畏れる。人間は万物の靈長であるから、死を畏れる中であっても、当然ながら、死を畏れない理由を選び出して安住する必要があるだろう。

それについて、自分は次のように考える。己の「身体」は天の命を受けてこの世に生まれたものだから、死生を決める権は天にある。だから従順に天の命を受けるべきである。我々が生まれたのは自然の理であって、生まれた時の喜びを知らない。また、我々の死ぬのも自然なことだから、死を悲しまないのが当然だ。天が我々を生み、死なすのだから、死生は天に任すべきもので、どうして畏れることがあろうか。

己の「本性」も又、天が与えたものである。この身体は天の与えた本性をしまっておく室である。精気が凝って形あるものとなるや、本性はこの室に寄寓し、魂が遊離すると、本性はこの室より離れる。

死ねば生まれ、生まれると死ぬのが道理であって、本性の本性たる理由は、常に死生の外にある。だから自分は死を少しも畏れない。昼夜に一つの道理があるのと同様に、死生にも一つの道理がある。始めがあれば必ず終わりがあるのが道理である。これほど簡単なものはない。我々はこの道理を踏まえて、自らを顧みるべきである。

(余説) 前回に続く「死生観」です。一斎先生もくどい感じがしますが、人類普遍の問いであり、簡単には答えが出そうにもない「死生」の章に、西郷どんはなぜこれ程までに心を動かされ、1133章からこの長い章を101章に、又も加えたのでしょうか。

安政の大獄で幕吏の追捕を逃れて、僧月照を伴い鹿児島にたどりついたものの、ここも安住の地ではなく、二人は錦江湾に身を投じます。月照は死に、西郷どんは助けられ蘇生します。さらに沖永良部に幽囚の身となり、常に死と隣り合い、死を見つめざるを得ない境遇にあった時に、言志四録に出会ったことが、その背景にありそうです。

私は、この章にはもっと深遠な意味が含まれているように思います。本文中の「性」、つまり本性を「靈」に置き換えて読んでみると、何だか分かるような気がします。

さらに文頭の「生物は皆死を畏る」について、死を畏れるのは人間だけでも言われます。猫も象も死を畏れているようには思えません。一斎先生には申し訳ないですが、人間のみが現世とか来世とか、地獄とか極楽とかを考え、恐れ悩むのではないのでしょうか。

(参考) 孟子・尽心上篇(二)「命に非ざる莫きも。順いて其の正を受くべし」(人生は運命に支配されないことはまれだから、すなおに天命の正しい裁きを受けなければならない) 順いて…べし：多少の例外を認めた肯定 例え「人事を尽くして天命を待つ」